

# 観音寺城跡

— 江南の雄 六角氏 —



## アクセスマップ

- ・JR安土駅から（駅前レンタサイクルあり）  
桑実寺（要入山料）登山口まで徒歩約30分もしくは石寺登山口まで徒歩約1時間
- ・JR能登川駅から  
近江鉄道バスで川並バス停下車、川並登山口（結神社）まで徒歩約5分

## 観音寺城跡へ登城されるみなさんへ

観音寺城跡の見学にあたっては、十分な準備をして登山中、怪我の無いよう安全に努めてください。

城跡は大切な文化財です。また一部私有地も含まれています。マナーを守り、ゴミは自分で持ち帰るなどして、城跡の美化と保護に努めましょう。喫煙をはじめ、山での火の使用は止めましょう。

埋蔵文化財活用ブックレット11（近江の城郭6）  
観音寺城跡

刊 行：平成23年9月12日  
編 集：滋賀県教育委員会  
制作・刊行：滋賀県教育委員会事務局文化財保護課  
住 所：〒520-8577 大津市京町四丁目1番1号  
電 話：077(528)4674 ・ FAX:077(528)4956  
e-mail: ma07@pref.shiga.lg.jp  
印 刷：近江印刷株式会社



## ■ 目 次 ■

1. 史跡観音寺城跡	1
2. 佐々木六角氏と近江	2
3. 城郭の構造	
●伝本丸・伝平井丸・伝池田丸	6
●伝布施淡路丸	8
●伝目賀田丸	8
●伝池田丸下方郭群	10
●大土塁	12
4. 発掘調査	
●平成の発掘調査	14
●昭和の発掘調査	16
5. 城下町	
●石寺	18
●御屋形跡	21
6. ゆかりの社寺	
●観音寺	22
●桑実寺	24
●教林坊	26
●奥石神社・史跡老蘇森	28

本埋蔵文化財活用ブックレットは、滋賀県教育委員会が国庫補助金（史跡等及び埋蔵文化財公開活用事業費）を受けて刊行した。

表紙写真：蒲生郡佐々木山古城全図（滋賀県立安土城考古博物館蔵）

## ■ 1. 史跡観音寺城跡 ■

近江守護佐々木六角氏が戦国時代に居城としたのが観音寺城です。標高 432m の織山の山頂から南山麓にかけて郭が広がる大城郭で、中世五大山城の一つに数えられます。

観音寺城が登場するのは南北朝時代。佐々木氏頼が観音寺に布陣したことが『太平記』に記されていますが、この時は単なる砦のようなものだったと思われます。それ以後もしばしば陣所とされているようですが、佐々木六角氏の居住する城として整備されたのは、16 世紀前半のことと考えられます。

観音寺城の特徴は石垣を多用している点にあります。城郭への石垣の本格的な導入は安土城以後のことであり、それより古い観音寺城に石垣が多用されているのは例外的なことで、戦国時代としてはほとんど唯一の城になります。

観音寺城の中核部分は、本谷を挟んで観音正寺境内の向かい側にある、伝本丸、伝平井丸、伝池田丸のあたりと考えられます。これらの郭は、城内でも特に面積が大きく、方形志向の平面形を呈し、大石を使った壮大な石塁が郭を囲んでいます。天文 13 年（1544）に城を訪れた連歌師谷宗牧は、山上の城の「御二階」の座敷に案内され、そこには「数寄」の茶室に茶器の名品が用意されていて、城の退出にあたっては秘蔵の古筆を送られたと書いています。観音寺城が要塞であるとともに、六角氏の風雅な生活の場所であったことがうかがえます。

永禄 11 年（1568）に織田信長が観音寺城を攻撃すると、六角承禎・義治親子は正面から戦うことなく逃亡し、あっけなく開城しました。その後、天正 7 年（1579）に安土城が完成したことで、観音寺城は歴史的役割を終えたようです。

## ■ 2. 佐々木六角氏と近江 ■

佐々木氏は宇多天皇の皇子敦実親王を祖とする宇多源氏の一族です。一方近江国には蒲生郡に勢力を誇った古代豪族佐々貴山君の一族がいました。佐々木氏は、平安末期以降勢力を拡大する中で佐々貴山君の一族を自身の系譜にのみ込み、同化させていきました。

佐々木氏の興隆の原点は平安時代末期、佐々木秀義が源頼朝の挙兵に一族を率いて源平合戦に参加したことに始まります。この合戦で大きな戦功を上げた結果、長男定綱は近江国惣追捕使（のちの守護職）に補任され、以後 400 年にわたって佐々木氏の惣領家が代々近江守護を勤めます。定綱の子信綱の死後に、四人の男子が所領を分割して独立しました。長男の重綱は坂田郡大原庄を得て大原氏を、次男高信は高島郡田中郷を得て高島氏を名乗ります。

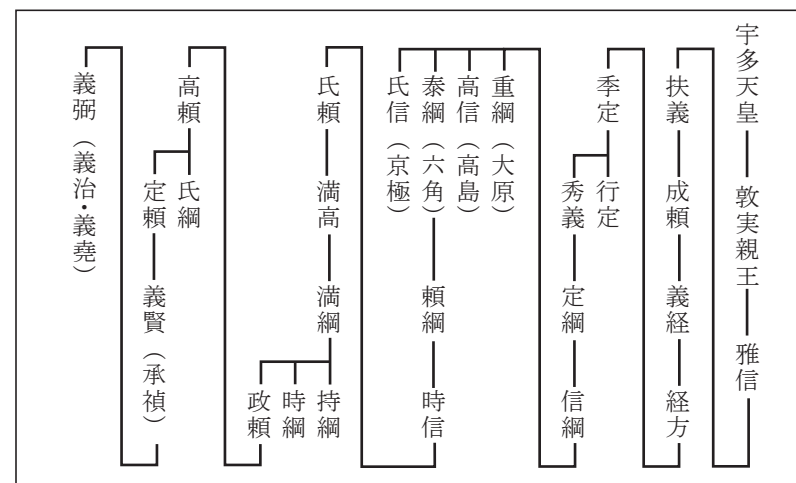
三男泰綱は惣領家として江南六郡を与えられ、京都六角東洞院に屋敷があったことから六角氏を、四男氏信は大原庄・田中郷を除く江北六郡を与えられ、屋敷が京極高辻にあったことから京極氏を称します。以後、この六角氏が惣領家として代々近江守護職を継承していきます。佐々木一族は近江以外にも多くの所領を持ち、最盛期には延べ 17 カ国の守護に任じられていました。

さて、近江において権勢を誇った六角氏ですが、惣領家の内紛や、様々な諸勢力との対立などしばしばその支配を動揺させます。しかしそうした中で、守護として領国支配を維持し続けた点は評価できる点でしょう。一般に領主としての実力を低く見られがちな六角氏ですが、誤ったイメージといわざるをえません。

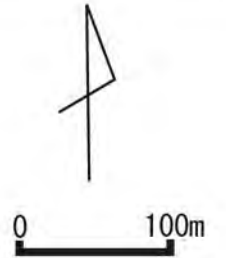
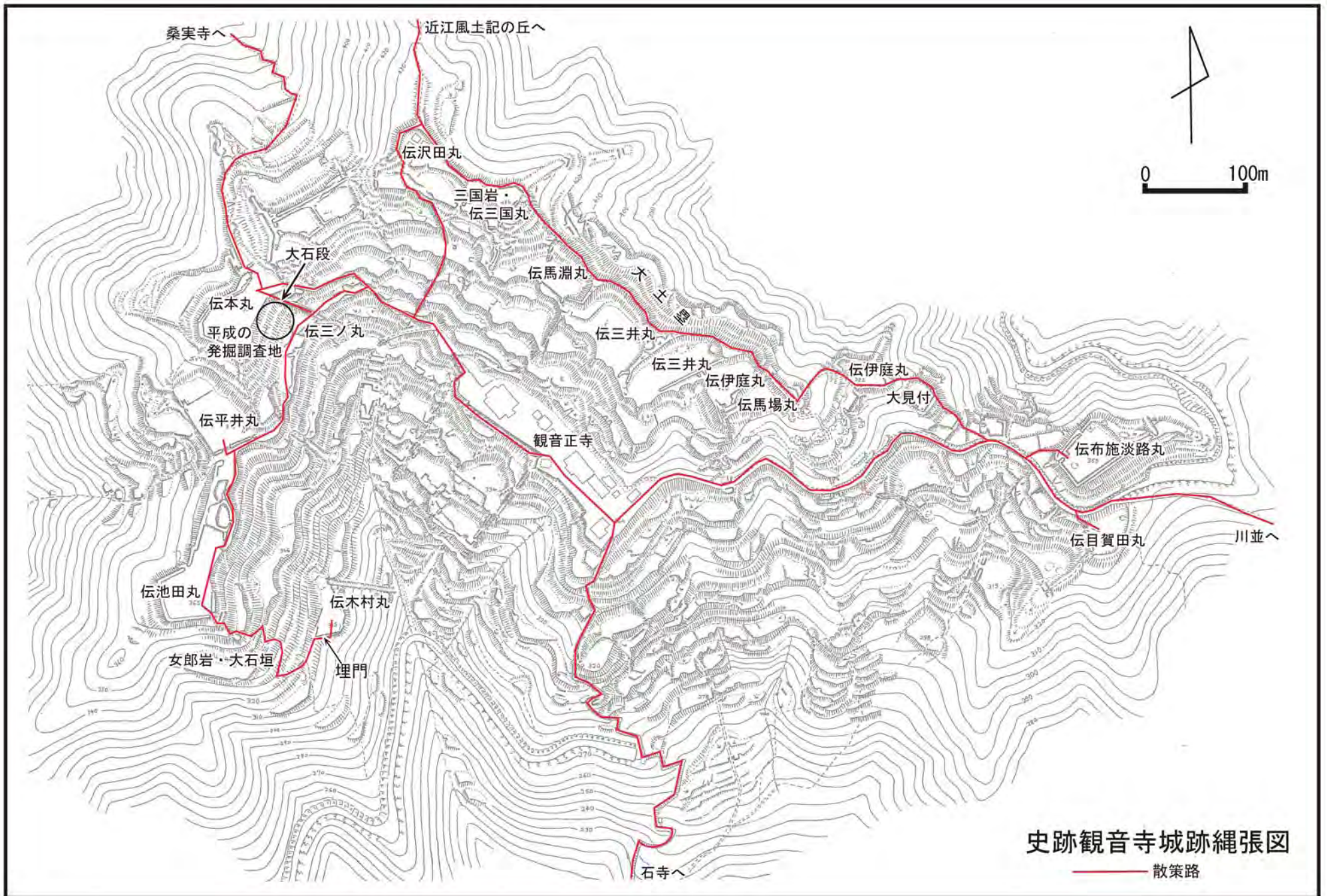
こうした六角氏の実力を示すものに室町幕府との密接な

関係があります。特に六角定頼は幕政にも深く関わり、また京都を追われた將軍足利義晴を援助するなど幕府の後ろ盾として活躍します。しかしそれでも近江国内の在地領主たちと強力な主従関係を結ぶことができず、彼らとの関係は双務的な契約関係に近いままでした。そのことを如実に示す事件が永禄 6 年（1563）に起こった観音寺騒動です。この事件は、有力な家臣であった後藤賢豊父子を六角義弼が観音寺城内において謀殺したことに端を発し、在地領主たちは城内の屋敷地を焼いて六角氏のもとを離れていきます。永禄 10 年に定められた六角氏式目は六角氏当主と在地領主たちがお互いに式目の条項を守ることを誓約したもので、法令というよりは契約というべきものでした。

六角氏は織田信長の侵攻の前に観音寺城を逃げ去りますが、在地領主たちはそれ以前から信長によって切り崩されていきました。このことも、六角氏と在地領主たちとの関係が、強力な主従関係によって結ばれていなかったことを示すものといえます。



佐々木六角氏略系図



史跡観音寺城跡縄張図

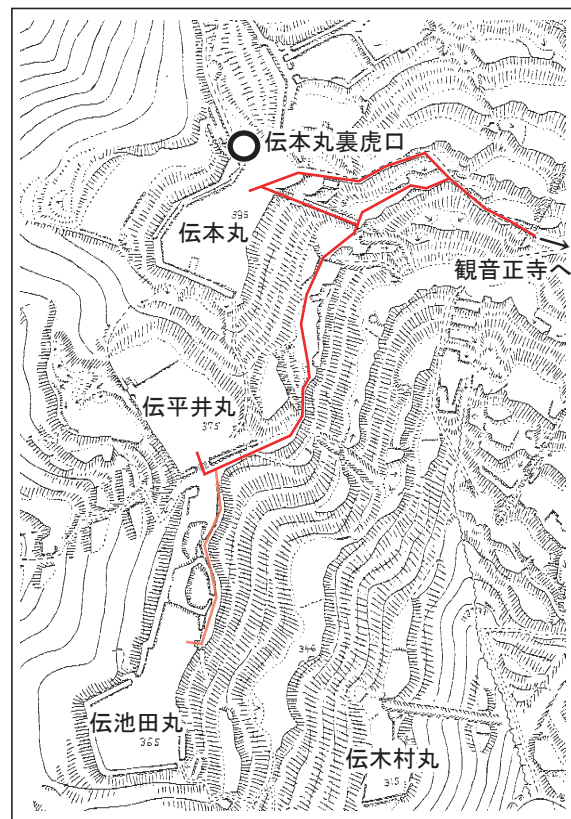
— 散策路

### ■ 3. 城郭の構造 ■

#### ● 伝本丸・伝平井丸・伝池田丸

山頂から南西に延びる尾根筋上の郭です。尾根の先端から北に向かって伝池田丸・伝平井丸・伝本丸と大きな郭が並びます。伝本丸は江戸時代の古絵図に「本城」と記されていることから、城の中核部分とされていますが、ここよりも高い地点にも郭が存在すること、この場所が郭の分布する範囲の西端に位置することなどから、城の中核部分として理解してよいかは疑問が持たれています。伝平井丸・伝池田丸は六角氏の被官であった平井氏・池田氏の屋敷跡とされる郭で、これも古絵図の記述が根拠となっています。

いずれの郭も周囲を石塁で囲われ、虎口を伴っています。虎口は簡易な平虎口が基本ですが、伝本丸の北から桑実寺に向かう場所に位置する裏虎口は、石塁をずらして配置する食い違い虎口となっています。ただし、周囲の状況からみて後から改修されたものである可能性があります。また伝平井丸の虎口は、城内でも最も巨大な石を用いた立派な平虎口です。



— : 散策路  
伝本丸・伝平井丸・伝池田丸  
周辺縄張図



伝本丸裏虎口



伝平井丸虎口

## ● 伝布施淡路丸

山頂から東に延びる尾根上の東端に位置する郭です。六角氏の被官布施氏の屋敷跡といわれていますが、その位置からみて城の東方を防御・監視する役目を担った郭と考えられます。郭は長方形をしており、北辺に尾根を削りだした土塁があるほか、三方が石塁で囲われています。郭の南を通る道から入る虎口は、石塁の端を折り曲げて枡形状にしています。



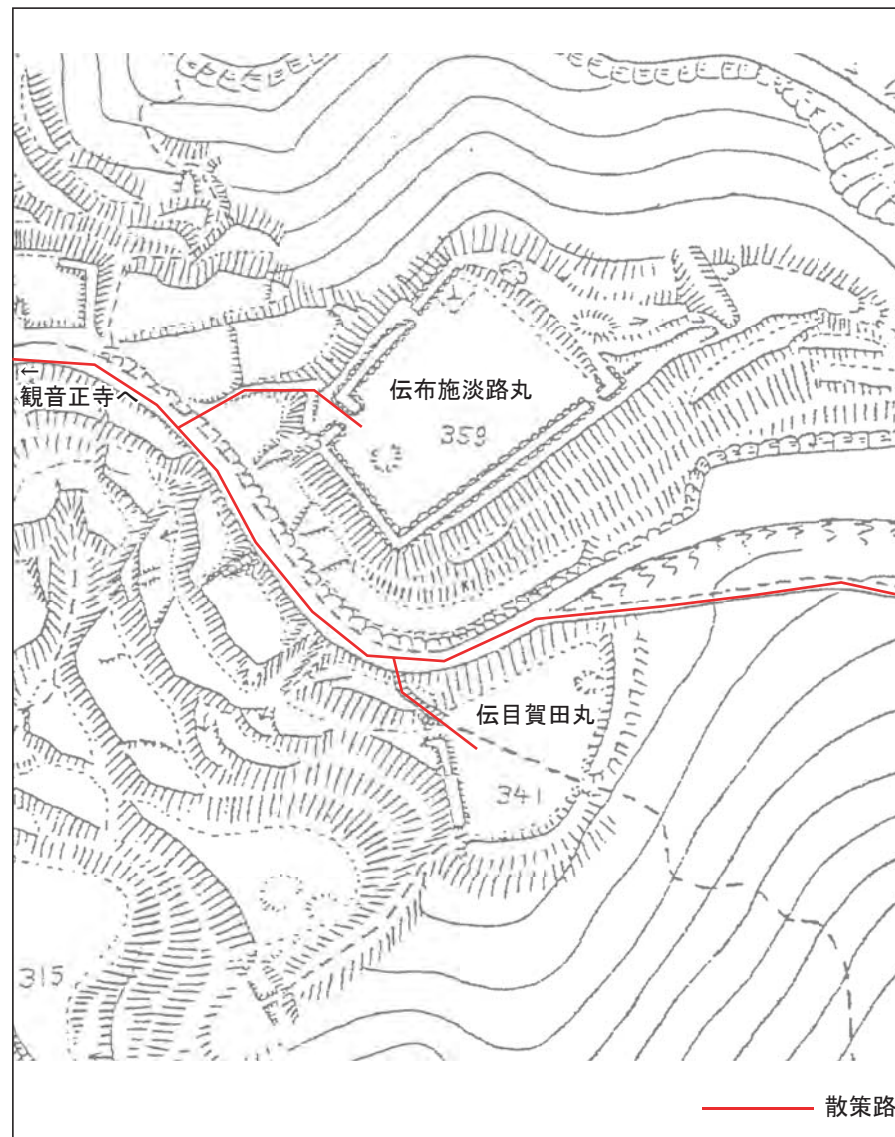
伝布施淡路丸

## ● 伝目賀田丸

伝布施淡路丸と、現在の観音正寺参道をはさんで向かい側に位置する郭です。六角氏の被官目賀田氏の屋敷跡といわれていますが、城の南方に位置する東山道方面を監視する役目を担った郭と考えられます。郭は、南側から西方にかけて土塁がめぐり、西方の下段郭に向かって虎口が開いています。また南側斜面方向の土塁にも平虎口が開き、そこから山麓に向かって道が延びています。この道は源三谷という谷筋を通ることから源三谷道と呼ばれています。



伝目賀田丸



伝布施淡路丸・伝目賀田丸周辺縄張図

## ● 伝池田丸下方郭群

伝池田丸の南東斜面にいくつかの郭がひな壇状に広がっています。もっとも下段に位置する郭には伝木村丸の名称が付されていますが、他は名も無き郭群です。これらの郭は、伝池田丸から南方に延びる尾根筋から東方に広がっており、尾根上を通る追手道沿いに位置しています。伝池田丸から二段下がった郭には通称大石垣と呼ばれる高石垣がありますが、これは城内でも有数の立派な石垣です。

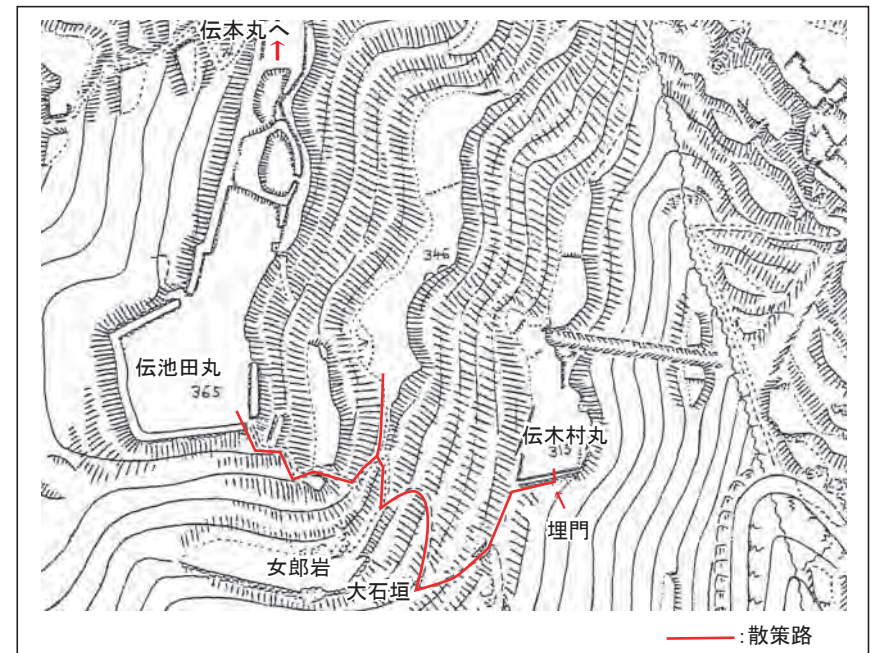


大石垣

また、伝木村丸の石塁には、途中、トンネル状に穴が空いた埋門があります。同じような虎口は、伝平井丸などにも見られ、観音寺城の特徴的な虎口の一つとなっています。



伝木村丸埋門



伝池田丸下方郭群縄張図

## ● 大土塁

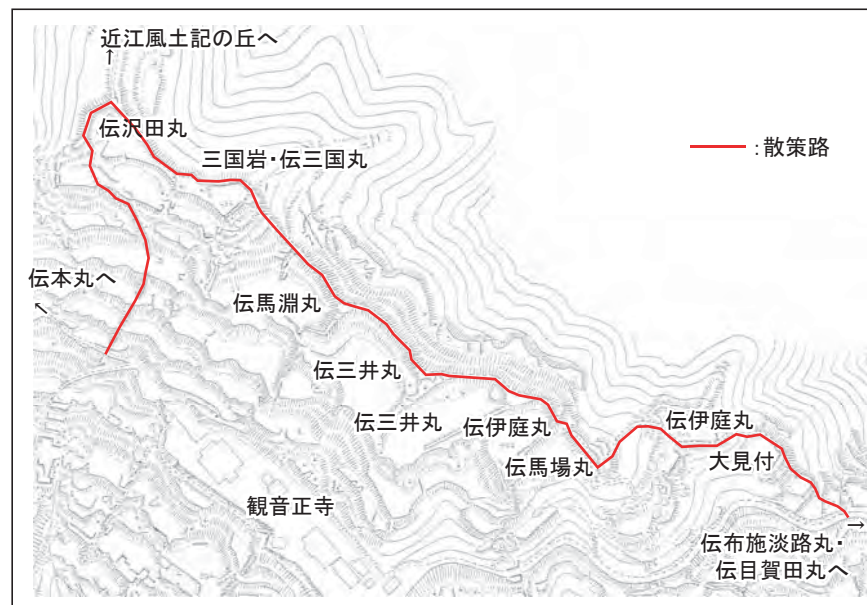
観音寺城の北端の尾根筋を土塁として利用したものです。土塁の南側に大見付・伝馬場丸・伝伊庭丸・伝三井丸・伝馬淵丸といった郭群が並びます。尾根筋の最も高い場所には三国岩と呼ばれる巨石と石塁によって囲われた伝三国丸と呼ばれる郭があります。北側の防御を固めるポイントとして櫓台的な役割を持っていたと考えられています。その西側、かつて鉄塔が建っていた場所が伝沢田丸です。城内でももっとも高い場所に位置する郭であり、本来なら尾根上に郭を造ってもよい場所ですが、尾根の南側にわざわざ尾根を削り込んで郭を造るなど、理解の難しい郭です。



伝伊庭丸の石垣



伝三国丸の石垣



大土塁周辺縄張図



## ■ 4. 発掘調査 ■

### ● 平成の発掘調査

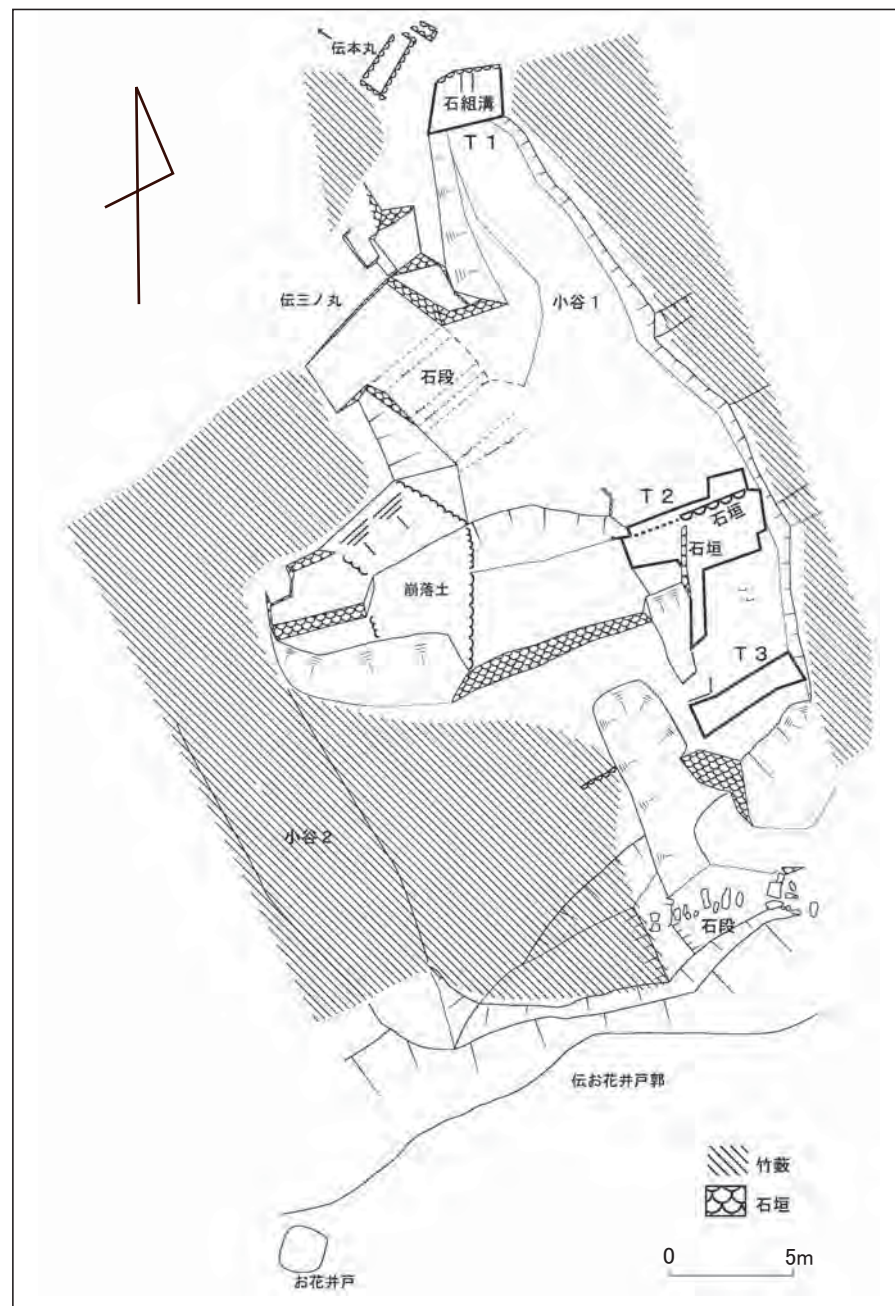
平成 20 年度～ 22 年度にかけて伝本丸にいたるルートを確認するための発掘調査を行いました。伝本丸から東に下る大石段に取り付くルートを確認するのが主な目的です。

大石段の最下段に隣接する伝三ノ丸は、当初大石段へといたるルートの途中にあって、伝本丸を守る郭と考えられてきました。しかし大石段との接続部分に石塁があることが確認され、伝三ノ丸と大石段はつながらないことが明らかとなりました。また大石段を下に延長した部分は現在谷筋となっており、大石段につづく石段の延長ではないかと考えられてきました。しかし調査の結果、この谷を横切る形で石垣が発見され、ここもやはり大石段にはつながらないことが明らかとなりました。

これまで、その規模の大きさから、大石段が伝本丸へといたる大手道と考えられてきたのですが、大石段の下方からは大石段につながるルートが確認できませんでした。大石段の性格そのものを見直す必要が生じてきました。



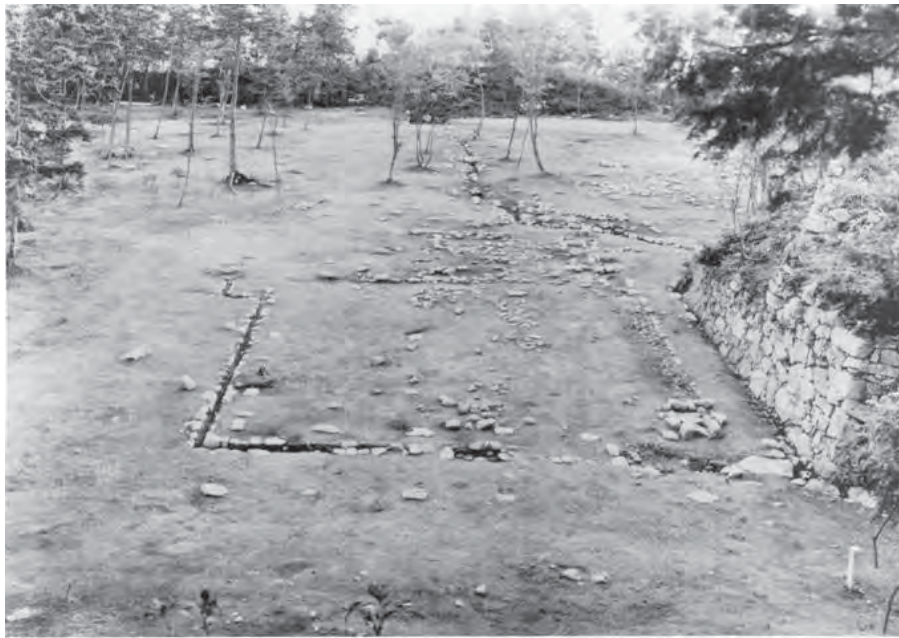
大石段下の谷筋遺構全景



平成 22 年度 観音寺城跡発掘調査区遺構配置図

## ● 昭和の発掘調査

史跡観音寺城跡では、昭和 44 年・45 年（1969・1970）に環境整備事業に伴って伝本丸・伝平井丸・伝池田丸の発掘調査が行われ、建物礎石や庭園遺構、排水路、溜枡などの遺構が発見されました。また、大量の土師器やすり鉢、輸入陶磁器など、16 世紀後半の遺物が出土しています。これらの調査結果から、戦国期に現状見られるような形に城が整備されたと考えられます。また、山上の郭から大量の生活遺物が出土していることから、文献資料にも記されているように、山上の郭群で生活するようになったことがうかがえます。



伝本丸 遺構全景



発掘調査で出土した遺物

## ■ 5. 城下町 ■

### ● 石寺

石寺は織山の南麓に広がる集落で、近江守護六角氏の居城観音寺城の城下町があった場所です。石寺の名前が史料に現れるのは文明元年（1469）からですが、観音寺城が城郭として整備され始めるのもこの頃からと考えられ、城郭と合わせて城下の整備も進められたものと考えられます。

石寺の構造については地名や地籍図、発掘調査成果をもとに解明が進められています。現在も山麓部分に住宅が建ち並んでいますが、こうした景観は城下町時代とほぼ同じと考えられます。宅地部分のもっとも高い場所に天満宮があります。ここは「上御用屋敷」の地名が残り、六角氏の御屋形跡に比定されています。郭を形作る石垣は、城内でももっとも高い石垣です。ここから山麓にかけて郭が雛壇状に広がっています。これらは家臣団あるいは直属の商工業者の屋敷跡と考えられますが、観音正寺の坊跡でもあり、これらをどう区別していくかが今後の課題です。

集落の南側は田地となっています。現在はほ場整備を経て地割が代わっていますが、もとは蒲生郡条里方向の地割が残っていました。したがってこの部分は居住域ではなかったと考えられます。さらに南、現在の新幹線と観音正寺へ向かう参道とが交わるところが東山道からの分岐点です。この付近には「構口」という地名があり、城下町の入口を示すものと考えられます。

ところで石寺といえば史上初めて楽市が実施されたことで知られています。天文 18 年（1549）に近江守護六角氏の奉行人から枝村（滋賀県犬上郡豊郷町）商人に宛てて出された文書には、「紙商買の事、石寺新市の儀、楽市たるの条、

是非に及ばず」として石寺新市を楽市とする旨の文言が書かれています。この石寺新市の場所については、奥石神社付近に「エビス」という地名があることから、この付近に比定されています。「構口」よりも南にあたり、城下町の外にあったことになりませんが、戦国期の城下町は、一般的に家臣団や直属商工業者が暮らす町場と商業活動の場である市場が分離していたと考えられ、石寺についてもそうした戦国期城下町特有の構造を持っていたものと考えられます。しかし近年、現石寺集落のすぐ南側にも「エビス」の地名があることから、こちらを石寺新市の場所とする見解が出されており、石寺城下町の再検討が進められつつあります。



石寺の中央を通る下街道



構口からみた史跡観音寺城跡



観音寺城下町周辺図

## ● 御屋形跡

石寺集落のもっとも高所に位置する場所が御屋形跡です。ここには現在天満宮が建っていますが、「上御用屋敷」という地名があることから、六角氏当主の居館跡に比定されています。発掘調査が行われていないため、遺構の状況などは分かりませんが、山城の麓という立地は、まさに平時の居館であったことを想定させます。おそらく、六角氏が観音寺城を居城とした当初は、山麓の居館を平時の住まいとしていたと考えられます。その頃の山上は、合戦時にこもる砦のようなもので、16世紀半ばに入り、生活の場を山上に移すようになってから山城部分の整備が行われたと思われます。郭の土台を形成する高石垣は、城内でももっとも高いもので約6mになります。隅の積み方は整然とした算木ではなく、稚拙な印象を与えることから、比較的古い時代に積まれたものと考えられますが、伝平井丸の石垣とも積み方が似ており、単純に山上の郭群に先行して整備されたとはいえないようです。



御屋形跡の高石垣

## ■ 6. ゆかりの社寺 ■

### ● 観音正寺

観音寺城跡の中央に境内を構えている観音正寺は、西国三三所観音霊場の第三番札所として多くの参拝客を集めています。中世には観音寺と呼ばれたこの寺は、六角氏がここへ居城を整備したために、観音寺城とは切り離せない歴史を共有してきました。

観音正寺の創建には、次のような聖徳太子の伝説が伝えられています。太子がこの地を訪れたおりに水辺から現れた人魚が、「魚を捕ってなりわいとした前世がたたってこのような姿に生まれたから、伽藍を建てて菩提を弔ってほしい。」と願い出たといひます。願いを受け入れた太子が千手観音を刻んで念じたところ、人魚は天人に生まれ変わって感謝しました。この時の観音像と伽藍が観音寺となった、ということです。この伝説を反映して、観音正寺には人魚のミイラが伝えられていました。

観音正寺は、最盛期には33坊、別の伝では72ヶ坊3院あったと伝えられています。現在残されている観音寺城跡の中には、六角氏が城として整備した遺構のほかに、中世の観音寺や近世に復興された観音正寺の遺構が含まれていると考えられます。しかし、城と寺がどのように配置され、それぞれはどのような姿だったのかはまだほとんどわかっていません。

戦国時代になって山上に城が整備され、戦乱の影響が及ぶようになると、観音正寺はこれを避けて山麓に移築され、その場所は観音谷と呼ばれる谷口であったといわれています。山麓を通る景清道沿いには、観音谷から本坂までの間に観音正寺の諸坊があったことを示す石垣が残されていま

す。今では教林坊が残るだけですが、その庭は小堀遠州の作事によると伝えられ、市の文化財に指定されています。

観音正寺は、戦国の世がおさまった慶長年間に山上に復興されました。現在の堂舎が並んでいる境内は、江戸時代以降に大幅な造成が行われたもののようです。明治15年には、彦根城の櫓御殿を移築した本堂が現在の位置に建てられました。本尊の木造千手観音立像（明応6年（1497）造立）は国の重要文化財に指定されましたが、平成5年の火災で本堂や人魚のミイラとともに、焼失してしまいました。現在は本堂と本尊が新たな姿で再建されています。



観音正寺境内



観音正寺本堂

## ● 桑実寺

白鳳6年(677)に天智天皇の勅願で創建されたと伝えられる桑実寺は、薬師如来を本尊とする寺です。藤原鎌足の長男定恵が寺を開基したと伝えられています。寺名の由来は、定恵が中国から桑を持ち帰って養蚕を広めたことにちなむとされています。室町時代前期に建造された本堂は国の重要文化財に指定され、昭和57年から60年にかけて修復工事が行われました。

桑実寺は織山西方の谷間に位置していて、観音寺城の西からの登城道の途中にあります。石段の築かれた参道には立派な石垣を積んだ坊跡が両側に並び、2院16坊あったという往事の姿を偲ばせています。桑実寺も、六角氏との深い関わりのもとで中世史に登場しました。

戦国の風潮の広がりとともに権力基盤が揺らいだ將軍足利義晴は、戦乱を避けて都を脱出し、六角定頼を頼って近江の各地に寄寓しました。その義晴が天文元年(1532)前後の数年間を過ごしたのが桑実寺です。義晴が滞在したのは、室町幕府最後の將軍である義昭が着陣したのと同じ桑実寺の子院正覚院であったと考えられます。義晴はここで婚儀を行うなどしたので、この地には都の要人が頻繁に訪れ、さながら仮幕府のようであったといわれています。正覚院滞在中の義晴は、土佐光茂に「桑実寺縁起絵巻」を描かせて桑実寺に奉納しました。国の重要文化財に指定されているこの絵巻は、現在は京都国立博物館に寄託され、寺には副本がおかれています。

義晴が近江に寄寓したことは、六角氏当主であった定頼にとって、権勢と幕府への影響力を維持することに大いに益するものでした。六角氏は戦国時代末期まで命脈を保ち

ましたが、その地位は幕府の近江守護であることに立脚していたので、家臣団を組織して武力を背景に領地を拡大した戦国大名とは本来的に性質が異なっていました。

信長が観音寺城を攻撃して六角氏を放逐すると、信長は桑実寺に足利義昭を迎え入れて、自身の上洛にそなえました。義昭が着陣した正覚院は、桑実寺参道の山門を入れてすぐの右手がその跡地とされています。現在は竹林が茂っていて立ち入ることはできませんが、敷地にある巨石は正覚院の庭石であったともいわれています。正覚院扁額は近江八幡市安土町下豊浦の東南寺に保存されています。



重要文化財  
桑実寺本堂



正覚院跡の石垣

## ● 教林坊

教林坊は、織山山麓の石寺集落内に位置する天台宗寺院です。かつては、最盛期には 70 を超える坊舎・子院があったとされる観音正寺の子院の一つでした。この数字をそのまま鵜呑みにできないのはもちろんですが、今も山内に残る多数の郭跡については、一般に観音寺城の遺構としてとらえられています。あるいは観音正寺の坊跡であった可能性も最近指摘されています。子院について確かなところでは、天保 12 年 (1841) 作成の「寺社分限帳」(観音正寺所蔵)に観音正寺の子院として定円坊・本乗坊・松林坊・宝泉坊・観泉坊・福泉坊・松寿坊・徳万坊・光林坊・教林坊の 10 ヶ坊が記されています。

教林坊は、寺伝によれば聖徳太子が山内に開基した 33 ヶ坊の一つとされ、「寺社分限帳」によれば天正 13 年 (1585) に創立されたと記されています。観音正寺については、六角氏が観音寺城を整備した時に山上の坊舎を山麓に移し、本能寺の変の後再び山上に建物を移したとされていますので、天正 13 年という年号は、本能寺の変後の再興時を示しているのではないのでしょうか。その後、他の子院が無住になって廃坊となる明治以降も唯一存続し、その間一時無住となるものの現在まで山麓で法灯を守り続けています。

教林坊所蔵の文化財としては、近江八幡市指定有形文化財となっている木造釈迦如来坐像と庫裏・表門、近江八幡市指定名勝となっている庭園があります。木造釈迦如来坐像は一木造りで室町時代の作品です。また今では剥落していますが、かつては金箔が施された黄金像だったことが分かっています。庫裏は江戸時代前期の建築と考えられ、入母屋造りの茅葺き屋根に棧瓦葺の庇がめぐっています。

西側が庭に面して座敷となっており、中央部が式台と寝間、東側が土間となっています。表門は江戸時代後期の建築と考えられ、棟木が親柱と控柱の中間に通る薬医門です。庭園は、小堀遠州の作ともいわれており、桃山時代のものとされています。巨石と池を配し、庫裏の座敷から庭を觀賞する池泉觀賞式の庭園です。また現在早稲田大学所蔵となっている教林文庫は、もと教林坊に所蔵されていた典籍類です。昭和 27 年 (1952) に住職辻井徳順師が亡くなった後、早稲田大学が購入しました。仏教書を中心に、日記・記録類、説話集、神道関係の資料や縁起類など、江戸から明治にかけての写本・版本類約 1200 点で構成されています。



近江八幡市指定文化財  
教林坊表門

## ● 奥石神社・史跡老蘇森

老蘇森は万葉時代から和歌の舞台となった蒲生野の一角にあります。東山道（中山道）の休憩の名所として、多くの旅人に親しまれ、ホトトギスの名所の歌枕として多くの歌に詠まれてきました。かつては現在の数倍の面積があり、東老蘇から西老蘇に広がる大森林だったようです。伝説には、昔この地は地裂け、水が湧き、とても人の住める場所ではなかったが、石邊大連なる人物が木の苗を植え、神々に祈願したところ、たちまち大森林となり、この大連は百数十歳の喜寿を重ねたので老蘇森と称したと伝えられます。低湿地に形成された大森林の一部が現存することから、学術的にも貴重な場所となっています。

奥石神社の創建は、社伝によれば、崇神天皇の代に吉備津彦が、武運長久のために勧進したのが始まりとされています。延喜式神名帳の蒲生郡十一座の一つに数えられる式内社で、古くは鎌宮と呼ばれ、近江守護の佐々木六角氏の崇敬を受けていました。大正 13 年に現在の奥石神社という社名に改められました。

明治 35 年に重要文化財に指定された本殿は、棟札の記録から天正 9 年（1581）の建立とされています。それによると、柴田新左衛門尉家久が願主となり、大工は西之庄の左右衛門三郎らで、観音寺住僧によって記録されたことが判ります。願主の新左衛門は信長の重臣柴田勝家の一族と考えられており、本殿再建（建立）は、信長が城下町を形成する政策に関連したものとも考えられています。

なお、本殿の西側に建つ一間社流造の諏訪社本殿は、桃山時代の建立と考えられており、近江八幡市指定文化財となっています。



奥石神社本殿（右）と諏訪社本殿（左）



史跡老蘇森